きんもくせい

令和２年　学校教育だより
December 12 第347号
（年４回発行）
編集・きんもくせい編集委員会
発行・埼玉県富士見市教育委員会
電話・049-251-2711（内線622）

編集目標　人間尊重の教育を求めて

第 45 回体育祭選手入場　歴史と伝統を受け継いで　　写真提供／東中学校

「初冬」

水谷中学校一年
早瀬　愛莉

初冬の匂い
初冬の寒さ

白い息を
空に向かってふきかけ

しもやけした手を
ぽけっとにしまう

宝物のように
命のように

ふじみ野小 ロボットと未来研究所

～論理的思考力と問題 解決力の充実をめざして～

指導者　ふじみ野小学校　教諭　西村　弘美

3年生の取組「みんなが安全に住める町をつくろう」

ふじみ野小学校は今年からSTEM教育を始めました。STEM教育とは、理数科や工学的な見方・考え方を重視した教育のことです。Science(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学)、Mathematics(数学)の頭文字を取ってSTEM教育です。ロボットづくりやプログラミングなど、ものづくりを通じて学習することで、子どもたちの論理的思考力や創造性、問題解決能力の向上を図ることを目的としています。今年は主に、レゴブロック「We Do」を使って、STEM教育を推進しています。

「We Do」は、子どもたちがブロックを使ってものづくりを行い、論理の思考力を養うための小学生向けの教材です。「We Do」を使って、ロボットをつくり、パソコンでプログラミングをして、動かします。今年度は、三年生～六年生が総合的な学習の時間などで、様々なプロジェクトに挑戦しています。

今回は、その中で、三年生の取組を紹介します。

1　自ら問題をみつける

子どもたちは社会科の学習で地域を探検したとき、スーパーマーケットの駐車場の近くに「危険、飛び出し注意」という看板を見つけました。子どもたちは「なぜ、ここに看板があるのだろう。」と疑問をもちました。飛び出しが多いところだから、運転手に知らせる為に看板があることに気づきました。教室に戻り、飛び出しをなくしたり、事故を減らしたりするためにはどうしたら解決できるのかを話し合い、子どもたちは「人が飛び出してきたら止まる車」、「障害物があったら止まる車」があるとよいのではないかと考えました。

2　学習テーマの設定

社会科の地域学習を通して地域の問題をみつけた子どもたちは、地域のためになる「人が飛び出してきたら止まる車」、「障害物があったら止まる車」を作ってみようということになりました。しかし、実物の車を作ることは難しいため、レゴブロック「We Do」を使って、車のモデルを作ってみようということにしました。そこで、学習テーマを「みんなが安全に住める町をつくろう～安全に使用できる車づくり～」としました。

3　問題解決をする

(1) レゴ「We Do」を使った車のモデルをつくる

自分たちの住む街をよりよくし、自分たちの生活をよりよいものにしていくために、何をどのようにしていったらよいか考えました。子どもたちは、自分の考えをワークシートに書き、「人感センサーをつけて人が来たら止まる車」、「ぶつかっても痛くない車」など、一人一人が様々な車を創造しました。そして、安全な車を思い浮かべながらレゴブロックでモデルを作りました。

(2) プログラミングをする

次に、自分が考えた車が正しく動くようにプログラムを考えます。「安全に使用できる車」にするために、「We Do」のパーツにあるモーターやモーションセンサーにプログラミングしていきます。自分が思い描く動きをさせるために、どのようなプログラムにしたらよいか、基本制御（順序、繰り返し、分岐）の方法を考えます。

続いて、自分で考えたプログラムをパソコンに打ち込み、実行します。自分が意図した通りに動かなければ、プログラムが間違っているので、プログラムを修正し再度実行します。自分が意図した通りに動いた時の子どもたちはとても嬉しそうでした。さらに理想の動きをする車になるように、プログラムを改良していきます。理想の動きをする車が完成すると、「やったあ。」と歓声をあげ、満面の笑みを浮かべていました。問題の解決ができた瞬間でした。

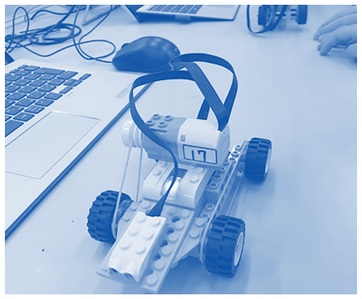
(3) 自分の考えを発表する・共有する

次に自分の車はどのようにプログラムしたか発表しました。「安全に使用できる車」は「人が飛び出して来たら止まるだけの車」ではなく、「音で知らせる」「色で知らせる」「点灯で知らせる」「画像で知らせる」などの考えが出てきました。子どもたちなりに様々な方法で問題を解決することができました。そして、できた喜びをみんなで共有しました。

4　まとめ

今年度からプログラミング教育が必修化されました。プログラミング教育は、プログラミングのスキルを学ぶだけでなく、論理的思考や創造性、問題解決能力、プログラミング的思考力を養っていくことが大切です。ふじみ野小では、教えこむのではなく、児童自ら解決方法を見つけていけるよう導いています。

今回は、プログラミング教育及びSTEM教育の視点から授業実践を行いました。今後も子どもたち自ら進んで問題解決に挑戦できるSTEM教育を推進し、子どもたちが論理的思考力を培える授業が実践できるよう励んでいきます。



指導講評

We Doを活用した学習（STEM教育）が大好きな子どもたち

ふじみ野小学校　校長　北田　裕一

三年生の実践を紹介しましたが、子どもたちは目を輝かせて学習に取り組みました。ふじみ野小の子どもたちはみんな、「We Do」を活用した学習（STEM教育）が大好きです。自分で考えたオリジナルのロボットを作ったり、真剣にプログラムを考えたりしています。そのときの集中力はものすごいです。

今年度、ふじみ野小学校では、埼玉大学教育学部　准教授　野村泰朗先生のご指導をいただきながらSTEM教育を進めています。また、ネットスタッフ（学校応援団）の皆様にも、ご協力をいただき、子どもたちのフォローをしていただいており、とても助かっております。

「目指せロボット博士ちゃん、高めろ論理的思考力」今後も、「ふじみ野小ロボットと未来研究所」は、子どもたちが積極的に学習に取組むSTEM教育の推進に励んで参ります。

子どもの四季

勝瀬小学校　5年
岩屋　風汰

「いのちの授業 ～そっと、ぎゅっと～」で学んだこと

ぼくは、「赤ちゃんってすごいんだな」と思いました。今までは、赤ちゃんのことを可愛く、力のない小さな子どもとしか思っていませんでしたが、赤ちゃんが自分の力で光り、肺呼吸を覚え、出てくる、そのことをいのちの授業で知りました。今までと全く違う印象をもちました。小さい体でもお母さんの体から出たり、光ったりする力があること、赤ちゃんにはすごい力があることを忘れないで生活していきたいです。

特別支援教育

今年のなの花学級

諏訪小学校　小林　秀人

今年は様々なことで、いつもとは違う日々を過ごしています。卒業式、入学式は短くなり、運動会、プール、各学年の校外学習など子どもたちが楽しみにしていた行事も中止されたり大きく変わったりしました。

そんな中でも、なの花学級には二人の一年生が入級し、上の学年の仲間たちと毎日元気に過ごしています。難しかったことが少しずつできるようになったり、新しい学習に興味をもって熱心に取り組んだりして、様々な新しい姿を見せてくれています。特に、音楽の時間は、リズムの学習やリトミックで体を動かすことをとても楽しみにしています。

また、それぞれの学年の授業や行事に参加する中で、学年の友達と声をかけ合い、がんばる姿を見せ合いながら、少しずつつながりを深めていく様子が見られます。

なの花学級の子どもたちにとって、友達に励まされたり、認められたりすることは何よりうれしいことです。学校全体に、優しい心のつながりがさらに広がっていってほしいと思います。

夢中になれるものがある強さ

水谷中学校　保護者　宮木　由美子

「石橋を叩いても渡らない」そんな息子に転機が訪れた。それは、バスケットボールとの出会いだ。

部活動本入部申込書提出の前夜、ギリギリまで悩んだ末、自らバスケットボール部入部を決断した。実際に入部してみると、不安は一気に吹き飛んでしまった。愛情溢れるご指導をしてくださる先生のもと、素晴らしい仲間とともに切磋琢磨する毎日は、とても刺激的で、あっという間に彼はバスケット部の魅力に取りつかれた。

そしてバスケットは、彼の心と体を大きく成長させてくれた。あきらめず困難に打ち勝つ強い心、一歩踏み出す勇気、相手を思いやる気持ち…。

新型コロナウイルス感染症の影響で休校になってしまい、先の見えない状況の中、彼は腐ることなく、いつ部活動が再開しても良いよう、練習メニューを考え、毎日コツコツと取り組んだ。その姿に私は、報道番組を見ては嘆いてばかりいた自分を恥じた。どんな状況でも前向きであることを、彼の背中を見て学んだ。

先生方のご尽力により、壮行試合は出来たが、不本意な形で部活動引退となってしまった。しかし、彼は高校でもバスケットボールを続けて技術を磨きたいと志を持っている。

夢中になれるものを見つけた彼は、本当に幸せ者だと思う。この先の人生、平坦な道のりばかりではないと思うが、大好きなバスケットボールを原動力に、前を向いて歩んでいってほしい。そして私は、これからも彼の応援団として、いやがられない程度に、見守り続けていきたい。

異年齢コミュニケーションで はぐくむ”生きる力“

水谷東小学校

生きる力をはぐくむ上で重要となってくる能力の一つに多様な人間とコミュニケーションをとる能力が上げられる。昭和の時代は子どもの数も多く、異年齢の子どもたちが一緒に遊ぶ中で、自然と人間関係を構築し、それぞれの役割や個性を学んでいった。外遊びが主流ではなくなり、それが期待できなくなった現代では、学校での様々な体験的な活動を通して異年齢間のコミュニケーションを学ばせる必要がある。本校では運動会の縦割り活動を基本に、「東っこまつり」や遊びの集会等を通して異年齢で遊んだり活動したりする経験を多くしてきた。今年度からは清掃に関しても縦割り「ぴっかり清掃」を取り入れ、特に高学年の自己肯定感や責任感を育てる取組を行っている。六年生に「ぴっかり清掃」の感想を聞くと「大変です。」と言葉が返ってくる。しかし、この言葉こそ自分の役割を自覚し全うしている証拠でもある。

ていました。その結果、この半年で息子は大きく成長をとげ、教室が再開される頃にはコーチたちが驚くほどに上達していました。また、そのことが自分への自信にもつながり、最近は日常生活においても積極的に行動するようになりました。

娘にとっては、「自分にもできる。」といった気持ちが、息子にとっては「自分が思い描くプレーがしたい。」といった自分の中の思いが明確になったことで、練習に対するやる気につながったのだと思います。

「感動のために」

水谷中学校

「もっとしっかりやろう！」「今のは良かったよ！」

どのクラスからも叱咤激励の声が聞こえてきます。

水谷中学校では、『感動は挑戦と思いやりから』という学校スローガンの下、日々生徒たちが努力を重ねています。

その努力の精神が最高潮に達するのが学校行事です。

普段から活発な生徒たちが、ひとつの目標に向けて、より自主的、行動的になります。

今年度、体育祭では、大きく活動が制限される中で、できることを考え、3年生を中心に、声を出さずに生徒全員で行う入場パフォーマンスを編み出しました。合唱祭でも、なかなか全員で合唱ができない中、自分たちでパートの割振りや練習のやり方を考え、合唱の完成に向けて取り組んでいきました。

教師は、相談にのったり、進み具合を確認したりしながら、より自主的に取り組めるよう、生徒に寄り添い見守っています。

自分たちが創る最高の「感動」のために、水中生は、今日も挑戦を続けています。

教育課題特集

生きる力を　はぐくむ

～学校・家庭・地域から～

明確さが力になる

水谷小学校　保護者　竹内　宏俊

私には小学校六年生の娘と三年生の息子がいます。二人とも二年ほど前から、体力向上のためバスケットボール教室に通い始めました。子供たちはどちらかと言えば不器用で、半年ほど練習してもなかなか上達しませんでした。

それでも娘の方は、生来の負けず嫌いな性格から基礎練習を自主的に行うようになり、一年後には見違える程上達しました。一方、おっとりした性格の息子は、なんとなくやっているような感じで一年たってもほとんど変わらないような状況でした。しかし、そんな息子にも転機が訪れます。きっかけは、コーチが教えてくれた「かっこいい!!」（息子いわく）ドリブルです。その日から人が変わったように練習に打ち込むようになり、新型コロナウイルスによる非常事態宣言の休校期間には、ひたすらドリブルの練習をしていました。その結果、この半年で息子は大きく成長をとげ、教室が再開される頃にはコーチたちが驚くほどに上達していました。また、そのことが自分への自信にもつながり、最近は日常生活においても積極的に行動するようになりました。

娘にとっては、「自分にもできる。」といった気持ちが、息子にとっては「自分が思い描くプレーがしたい。」といった自分の中の思いが明確になったことで、練習に対するやる気につながったのだと思います。

STEM教育を通じて生きる力を育む

地域文化振興課　佐藤　武士

富士見市では、少子高齢化による将来的な人口減少を見据え「選ばれるまち」を目指す取組を進めています。近年のICT（情報通信技術）の急速な発展やグローバル化の進展、本年から必修化されたプログラミング教育など、子どもの学ぶ環境は大きく変化し、それに伴い、子育て世代の方々の教育に対する意識も高まっています。

そこで他市にはない特長的な取組として、子どもたちの将来の可能性を拡げるため、県内では初めて埼玉大学STEM（ステム）教育研究センターとの共同研究という枠組みでSTEM教育をスタートしました。

STEM教育とは、S…SCIENCE（科学）、T…TECHNOLOGY（技術）、E…ENGINEERING（工学）、M…MATHEMATICS（数学）の頭文字で、21世紀の情報化社会、人工知能（AI）が活用される社会において科学技術を駆使し、問題解決ができる人材や専門分野で活躍する人材の育成を目的とした教育のことです。

市では、実践活動の場として、「ロボットと未来研究会富士見☆研究室」を開設し、子どもたち一人一人が研究員として、ものづくりやプログラミングを通じて、自ら考え、創造し、課題を解決できるように市民の協力を得てサポートしています。

本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で活動ができていませんが、関心の高い取組であるため、状況を見定めながら「富士見☆研究室」の活動を再開し、未来を担う子どもたちの選択肢を拡げる機会を提供していきたいと考えています。

人間尊重教育推進

わたしたちのまちに 育てよう 広げよう 人間尊重の心

一　富士見市は人間尊重宣言都市です

私たちのまち富士見市は、昭和四十一年に人間尊重都市宣言をしました。

「からだと心の健康を高めよう」

「自分を大切にするとともに、他人を尊重しよう」

「個性をよりよく生かし社会のために役立てよう」

と呼びかけながら私たちのまちを人間尊重のまちにすることを宣言したのです。

二　学校における人間尊重

市内の小・中・特別支援学校では、一人ひとりの子どもたちに確かな学力を身に付けさせるとともに、人間らしくよりよく生きる心をはぐくむための教育が実践されています。

また、すべての教職員により一人ひとりの子どもたちが大切にされ、互いに尊重し合い、信頼関係で結ばれた学校づくりが進められています。

三　家庭教育における人間尊重

子どもにとって家庭は、安らぎの場所であり、人間としての生き方を学ぶかけがえのない場です。また、親子のコミュニケーションは、食事が体をつくるのと同じように、子どもの豊かな心をはぐくむこととなります。家庭での温かい言葉かけは、子どもの心を育てる栄養となります。

毎日の家庭生活の中で、やさしさや思いやりなどの豊かな心が育つことを願って「家庭における人間尊重教育十か条」が作成されておりますのでご活用ください。

家庭、学校・行政が力を合わせ、一体となって子どもたちの健全な育成に努力していきましょう。

家庭における人間尊重教育十か条

一　人のいのちを大切にし
いのちある動物、植物をいたわりましょう

二　健康を大切にし　正しい食事と適度な運動でからだづくりにつとめましょう

三　おはよう、おやすみ、ただいま、おかえりのことばが聞こえる温かい家庭をつくりましょう

四　ありがとう、ごくろうさまの素直なことばで感謝の心を育てましょう

五　家族の仕事を分担し
家族の一員としての役割をはたしましょう

六　人の喜びを喜びとし　人の心の痛みを分かちあい助けあっていきましょう

七　やさしさ　いたわりの心を大切にし
おとしよりの方々に学びましょう

八　どんな物も人の汗と力でできることを知り物を大切にする心を育てましょう

九　正しくやさしいことばでつつまれた明るい家庭をつくりましょう

十　正しいことをつらぬく強い心で
勇気ある行動をとりましょう

人間尊重　わたしたちの合言葉

【小学生の部】

救われる
君の勇気と
一言で
（水谷東小学校　五年　児玉　侑奈）

困ったら
周りに相談
一人じゃない
（針ケ谷小学校　五年　神山　優臥）

【中学生の部】

なにか違う
そもそも違って
当たり前
（本郷中学校　二年　円谷　愛）

見つけたら
すぐに声かけ
いじめ０（ゼロ）
（東中学校　二年　渦波　幸咲）

〔入間地区人権教育推進協議会　応募作品より〕

人間尊重・私の主張

人権問題について

吃音

針ケ谷小学校
小屋　太誠

ぼくは、前にちょっとしたいじめにあっていました。その理由は、言葉がどもっていたからです。どもりとは吃音とも言われるもので、障害でもなく病気でもありませんが、しゃべっている途中に言葉がつっかえて出なくなったり、同じ文字を何度も言ってしまったり、話したいのに全く言葉が出なくなったりするなど色々な症状があります。ぼくには話し始めようとすると何度も同じ言葉をくり返す症状がありました。

幼稚園の年中の時に吃音が出始めて、友達と遊ぶときに真似をされたり、他のお母さんたちから変な目で見られたりすることもありました。でも気にせずに話しかけてくれる友達がたくさんいたので、ぼくも気にせずに話すことができました。すぐに治るだろうと思っていましたが、吃音が治らないまま一年生になりました。一年生になるとぼくを知らない子が多かったので、バカにされたりいじめてくる人が増えたけど、幼稚園からの友達がかばってくれたり、担任の先生、お母さんがぼくを支えてくれたりしました。

お母さんは、吃音を治すために本を読んだり、たくさん調べたりしてくれましたが、今のところ明確な治療法は見つかっておらず、ほとんどの人は治らないことが分かりました。でも「あいうす」という、吃音や発音がうまくできない子どもたちが通う言葉の教室を見つけてくれました。ぼくは、そこに通うことにしました。いじめはなくならなくて嫌だったけど「あいうす」でたくさんしゃべる練習をして、学校でも吃音を気にせずしゃべるようにしました。

「あいうす」の先生が、ぼくが言葉をたくさん知っていることや笑いのセンスがあることに気付き、たくさんほめてくれたことで、吃音も笑いに変えればいい、笑われてもいいと思えるようになりました。そうしていると言葉がスラスラと出てくることが増えてきました。調子よく話せる日、あまりうまく話せない日、その日によって症状がちがいましたが、気にせず毎日友達と話していたら四年生になった頃から吃音が治ってきました。いじめている子もいなくなり「あいうす」の中でもリーダー的な存在になっていて、吃音がはずかしくて話が出来ないと言っている子に、

「気にしないのが一番だよ。どもってもいいんだよ。」

と、自分の経験から言ってあげられるようになりました。

六年生になった今も時々スラスラと話せないことがありますが、友達がたくさんいるし、誰とでも話ができます。学校の授業でも発言ができるし、毎日が楽しいです。いじめに負けなくて本当によかったです。

あきらめなければ何でも出来る。今、吃音で苦しんでいる人。それ以外の悩みがある人もあきらめないでほしいです。やればできるし、支えてくれる人もかならずいます。一緒にがんばりましょう。

富士見市 いじめのない学校づくり子ども宣言

《小学校宣言》

私たちは、全校児童が仲良く楽しく過ごせる学校をつくるために、相手の気持ちを考えた行動を心がけ、いじめのない学校を目指し、以下のことを宣言します。

一私たちは、いじめをしている人に「遊び半分で相手を傷つけるようなことはしてはいけない」と注意します。
一私たちは、いじめられている人に「いつでも相談してね。一人でかかえこまないで。」と声をかけてあげます。
一私たちは、いじめを見ている人に「見ているのもいじめだよ。いっしょに助けてあげよう。」と言います。
一私たちは、お父さん、お母さん、先生たちに「子どもの変化に気づいて助けてください。」とお願いします。

私たちは、友だちのいいところを認め合い、いじめがなくなるまで、いじめはだめだと訴え続けます。

《中学校宣言》

私たちは、一人ひとりの個性を認め合える、いじめのない太陽のような学校をつくるために以下のことを宣言します。

一私たちは、いじめをしている人に「相手の気持ちになって、自分の言動を見つめよう。」と声をかけていきます。
一私たちは、いじめられている人に「一人じゃないから勇気を出して相談してね。」と声をかけていきます。
一私たちは、いじめを見ている人に「私たちの一言で救われる人がいるからみんなで助け合おうよ。」と声をかけていきます。
一私たちは、お父さん、お母さん、先生たちに「一人ひとりをちゃんと理解して、良くなかったら注意をしてください。」とお願いします。

私たちは、仲間を大切にして、いじめを撲滅する努力をします。

教育委員会だより

令和３年４月以降に高校・大学等に修学するお子様の保護者の方へ

＜富士見市＞利子補給制度のご案内

高校・大学等に修学するため、入学資金や在学資金など教育に要する資金を必要とされる方が、日本政策金融公庫の教育一般貸付を受けた場合に、教育の機会均等と経済的負担の軽減を図るため、市がその返済利子の一部を助成します。

1　交付対象

次の全てに該当する方

①高校、大学等に修学する方の保護者であること
②富士見市に住民登録があり、現に居住していること
③市税を滞納していないこと
④日本政策金融公庫から、教育資金の融資を受けていること
⑤修学先の入学時に「富士見市高等学校等入学準備金利子補給制度」による利子補給を受けていないこと

2　利子補給期間

在籍する高校、大学等の正規の修学期間とします。

3　利子補給金額

借入れに係る利子の年額（上限１万７千円）を助成します。
（※）利子の年額は、年度単位で計算します。

4　申請方法等

令和４年４月以降に申請受付を開始する予定です。

（※）申請方法・申請時期等の詳細は、令和４年４月以降に富士見市のＨＰや広報等にてご案内を予定しています。

◇利子補給に関する問合せ先

富士見市教育委員会　教育政策課（富士見市立中央図書館２階）
電話　０４９－２５１－２７１１（内線６１２）

◇教育一般貸付に関する申込み・問合せ先

日本政策金融公庫
教育ローンコールセンター：０５７０－００８６５６
（ナビダイヤル）
＜富士見市近くの店舗＞
日本政策金融公庫　川越支店
住所　川越市脇田本町１４番１ 日本生命川越ビル５階
電話　０４９－２４６－４１７１（申込み相談）

本案内は、令和４年度予算成立後、速やかに事業を開始できるようにするため、予算成立前に案内を行うものです。
実際の事業実施は、令和４年度予算の成立が前提であり、今後、内容等が変更になることもありますので、あらかじめご了承ください。

クラスの横顔

言葉の力

みずほ台小学校　教諭　赤間　隆平

九月十九日、「分散運動会」

今年度は、コロナウイルス感染症対策のため、様々な制限がかかりました。当日までには様々なことがありましたが、この日、六年二組の子どもたちは達成感・満足感に浸っていました。

分散運動会、一ヶ月前。「今年は徒競走と学年種目のみです。六年生の学年種目は全員リレーです。」そう告げると子どもたちは、とても残念そうでした。その後の練習においても気持ちの差が見られ、このままだとクラスがまとまらないと考え、学級会を開きました。そこで「分散運動会を最高の思い出にしたい」という気持ちを確認し合いました。

次の日から全員練習が始まりました。しかし、数人の子どもは練習に身が入っていないようでした。その時、ある子どもたちが「もう少し手を伸ばした方がいいよ」「今のはすごくいいタイミング」と声を掛けました。すると、声を掛けられた子どもたちは目の色が変わり、その子どもたちも周囲に前向きな声を掛けるようになりました。最後には二十秒以上タイムを縮めました。「よーい！」バーン・・・全員リレーは大成功。優勝こそ逃しましたが、全力を出し切り、全員の最高の思い出になりました。

言葉には、人を元気にする力があります。今回の分散運動会で、六年二組は「言葉の力」によって一つになることができました。子どもたちには、今回の経験を生かして、出会う人に前向きな声を掛け、元気にさせる人になってほしいと願ってやみません。

編集後記

今年も、もう残りわずかとなりました。あたたかい日があるとはいえ、朝晩、めっきり冬らしくなりました。登校する子どもたちも、手袋やマフラーなど、冬のよそおいです。

さて、八月十八日から始まった二学期も、この二十八日で終わります。学校では、二学期も新型コロナウイルス感染拡大防止にむけて、マスクの着用をはじめ、手洗いなど、保護者の皆さんにたくさんのご協力をいただきながら終了の日を迎えようとしています。

十二月といえば、クリスマスシーズン。子どもたちにとって、楽しみな行事の一つです。サンタクロースからのプレゼントをわくわくしながら待っている子どもたちも、たくさんいることでしょう。

そんな中、外出が厳しく制限されているイタリアに住む五歳の男の子が、首相に対して、クリスマスにむけてサンタクロースに特別な移動許可証の発行をお願いする手紙を送ったというニュースがありました。「サンタさんは、高齢で家に入るのは危険ですが、自分を守るためにマスクをするはずです。」という内容も付け加えて。

その手紙を受け取った首相は、サンタさんはすでに国際的な移動許可証をもっていること、マスクをするし、出会う人たちと自分を守るため、きちんと距離をとると言っていたそうです。

コロナ禍の中、子どもたちの生活にも様々な制限がありますが、子どもの願いをあたたかく受け止め、思いやりをもって対応してくれた首相の言葉に、感動した人がたくさんいます。

このような今だからこそ、わたしたちも、子どもたちに夢や希望を与えられる人でありたいと思います。（辻口）